

フランス語の数詞について

松 田 孝 江

はじめに

われわれ日本人が“フランス語を学ぶ”というとき、それはふつうフランス共和国の公用語としてのフランス語である。フランス語を学び始めた者がとまどうことの一つに、70 以上 100 までの数の数え方がある。60 台までは型どおりの 10 進法できたものが、70 からは、10 進法と 20 進法の奇妙な組み合わせ数字になるからである。パリを中心とする北フランスを離れて南仏に旅したり、国境を越えてベルギーやスイスに行くと、問題の 70 から 100 までの数詞に、聞き慣れない形が混じること気づくことがある。フランス語以外の現代ロマンス語ではどうなっているかをみてみると、ラテン語からの 10 進法を妙にねじ曲げてしまっているのは、フランス語だけであることが分かる。なぜフランス語だけが異質な数詞をとることになったのか、ラテン語から引き継いだはずの 10 進法はどうなってしまったのか、70 から 100 までの数詞を中心にその周辺を探究してみたい。

I. ラテン語および現代ロマンス諸語における数詞

フランス語の数詞に取り組む前に、フランス語をも含む現代ロマンス諸語と、その祖語であるラテン語の数詞についてみておこう。現代ロマンス諸語とは、厳密に言えば、ラテン語の流れをくむ諸方言の総体を指すのであるが、ここでは国家の公用語となっている、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語に留める。まず 1 から 20 までの数詞についてみてみよう。

ラテン語では 11~19 は、 $[1 \cdot 10]$ $[2 \cdot 10]$ … と並べていくが、18 と 19 には、表 1 に示した形以外に、*duodevīginti* $[2 \cdot \text{減} \cdot 20]$, *ūndēvīginti* $[1 \cdot \text{減} \cdot 20]$ という減数式もある。フランス語とイタリア語の 11~16 は、ラテン語式語順の数詞が音韻変化してできたものであるが、17, 18, 19 は $[10 \cdot 7]$, $[10 \cdot 8]$, $[10 \cdot 9]$ と、数の並べ方が逆転している。スペイン語とポルトガル語では、この並べ方の逆転が 16 から始まっている。ルーマニア語では 11 から 19 までは、 $[1 \cdot \text{プラス} \cdot 10]$ $[2 \cdot \text{プラス} \cdot 10]$ … と、“~の方へ”を意味する前置詞 *spre* が挿入されるが、これはスラブ語の影響によるものだといふ。⁽¹⁾ また 20 は、ルーマニア語だけが、ラテン語の *vīginti* とは無縁の $[2 \cdot 10]$ となっている。20 までの数に関する限り、どのことばもラテン語の子孫であることにはかなり忠実である。つぎに 20 から 100 までに現われる、10 の倍数をみてみよう。

20 から 100 に至る数は、フランス語以外はすべてラテン語式の 10 進法である。フランス語だけが 70 以上に独特な数え方をする。すなわち 70 $[60 \cdot 10]$ … 79 $[60 \cdot 19]$, 80 $[4 \cdot 20]$, 81 $[4 \cdot 20 \cdot 1]$ … 90 $[4 \cdot 20 \cdot 10]$ … 99 $[4 \cdot 20 \cdot 19]$ というように、下位の数を組み合わせて作るのである。60 のあとに 10 から 19 までを継ぎ足し、その先は $[4 \cdot 20]$ に 1 から 19 までを後置していく方式は、他のロマンス語にはみられない数え方である。

表1 ラテン語・ロマンス諸語の数詞 (I)

数詞	ラテン語	フランス語	イタリア語	スペイン語	ポルトガル語	ルーマニア語
1	ūnus	un	uno	uno	um	unu
2	duo	deux	due	dos	dois	doi
3	trēs	trois	tre	tres	três	trei
4	quattuor	quatre	quattro	cuatro	quatro	patru
5	quīnque	cinq	cinque	cinco	cinco	cinci
6	sex	six	sei	seis	seis	șase
7	septem	sept	sette	siete	sete	șapte
8	octō	huit	otto	ocho	oito	opt
9	novem	neuf	nove	nueve	nove	nouă
10	decem	dix	dieci	diez	dez	zece
11	ūndecim	onze	undici	once	onze	unsprezece
12	duodecim	douze	dodici	doce	doze	doisprezece
13	tredecim	treize	tredici	trece	treze	treisprezece
14	quattuordecim	quatorze	quattordici	catorce	catorze	paisprezece
15	quīndecim	quinze	quinidci	quince	quinze	cincisprezece
16	sēdecim	seize	sedici	dieciséis	dezesseis	șaisprezece
17	septendecim	dix-sept	diciassette	diecisiete	dezessete	șaptesprezece
18	octōdecim	dix-huit	diciotto	dieciocho	dezoito	optsprezece
19	novendecim	dix-neuf	diciannove	diecinueve	dezenove	nouăsprezece
20	vīgintī	vingt	venti	veinte	vinte	douăzeci

表2 ラテン語・ロマンス諸語の数詞 (II)

数詞	ラテン語	フランス語	イタリア語	スペイン語	ポルトガル語	ルーマニア語
20	vīgintī	vingt	venti	veinte	vinte	douăzeci
30	trīgintā	trente	trenta	treinta	trinta	treizeci
40	quadrāgintā	quarante	quaranta	cuarenta	quarenta	patruzeci
50	quīnquāgintā	cinquante	cinquanta	cincuenta	cinqüenta	cincizeci
60	sexāgintā	soixante	sessanta	sesenta	sessenta	șaizeci
70	septuāgintā	soixante-dix	settanta	setenta	setenta	șaptezeci
80	octōgintā	quatre-vingts	ottanta	ochenta	oitenta	optzeci
90	nōnāgintā	quatre-vingt-dix	novanta	noventa	noventa	nouăzeci
100	centum	cent	cento	ciento	cento	o sută

II. フランス語の数詞の変遷

(1) 中世フランス語

フランス語の初まりから19世紀までの数詞を追って、(1) 中世、(2) 16～17世紀、(3) 18～19世紀の流れをみてみよう。

フランス語誕生の証とされる『ストラスブールの誓約書』がとり決められたのは、紀元842年のことであった。しかし現存する最古の文学作品は900年頃のもので、文学史では、『聖アレクシス伝』(1040年?)あたりから説き始めることが多い。当時のフランス語ではどのような数の表わし

方をしていたのだろうか。著しい特長としていえることは、20を東ね、かなり大きな数までその倍数として表わす20進法をとっていたことである。ちなみにヴァルトブルクの語源辞典で quatre-vingts を繙くと、quatrevins という綴りで12世紀に初出とある。1215年頃には、 quatre-vingtz et dix が記録され、14世紀末には et を含まない quatre-vingt-dix になっている。初めて quatrevins が確認される12世紀頃の文学作品としては、『ローランの歌』『トリスタンとイゾー物語』『狐物語』、初期の『ファブリオ』などが浮かぶ。これらの多くは、ピカルディーやノルマンディー、シャンパーニュ地方の言葉で書かれていた。Nyrop は、中世の北フランスでは20進法が広く行われ、オイル語すなわち北部諸語では、20を基に dix-huit vingts (360) まで数えられていたとして、つぎのような数体系を記している。⁽²⁾

30, vint et dis — 40, deus vins — 60, trois vins — 70, trois vins et dis — 80, quatre vins — 90, quatre vins et dis — 120, sis vins — 140, set vins — 160, huit vins — 180, neuf vins — 220, onze vins — 240, douze vins — 280, quatorze vins — 300, quinze vins — 320, seize vins — 340, dis set vins — 360, dis huit vins.

この方式に従うと、ある20の倍数からつぎの倍数までは、うしろに1から19までを付け足していけばよい。上記の数詞には50, 100, 200, 260が欠けているがどうしてだろうか。50, 100, 200という区切りでは20進法は回避されたのだろうか。Nyrop はこれらについて何も語っていない。

人間は万物の尺度であるから、両手の指を合わせれば10進法となり、これに足の指を加えれば20進法になる。20を東ねればヒトひとり分ということになろう。20進法の上限は、倍加する数が基数と同じになる一歩手前、すなわち dix-neuf vingts まで可能なはずであるが、Nyrop の表ではその前の dis huit vins で止っている。これについては Damourette & Pichon も、用例があるのは dix-huit vingts までとしている。⁽³⁾

20進法が広く行なわれている一方で、ラテン語からの10進法もこれと共存していた。30, trente — 40, quarante — 50, cinquante — 60, seissante, soissante⁽⁴⁾ — 70, setante, septante⁽⁵⁾ — 80, oitante, uitante, octante⁽⁶⁾ — 90, nonante — 100, cent のシリーズである。

ところで70に関しては、競い合う trois vins et dis と setante [septante] に、さらに soixante-dix が加わることになる。10進法と20進法が混合したようなタイプであるが、Nyrop は12世紀末の武勲詩 *Chevalerie Osier* にその典拠を求めている。⁽⁷⁾

(2) 16世紀「ヴィレール＝コトレの勅令」から古典主義時代まで

10進法と20進法が競合状態にあった北仏の記数法は、中世も時代がくだるとともに、緩やかではあるが変化していった。20進法の数詞のなかで、10進法との関連において人々に偏愛されるもの、等しく選ばれるもの、敬遠されるものといった格差が生じてくるのである。そして同じ数に二つないしそれ以上の選択肢をもっていた記数システムは、長い間にその選択の幅を徐々に狭めていって、大方は一つのものに落ち着くことになるのである。

16世紀は中世を脱してルネッサンス期に入るわけであるが、言葉をめぐる外的な事情にも大きな変化があった。1470年にパリに初めて出現した印刷所は、16世紀に入って印刷活動を加速した。またフランソワ1世は、1539年に「ヴィレール＝コトレの勅令」を発して、すべての判決文および訴訟手続きに“フランス語の母語 (langage maternel françois) を使うように命じた。訴

訟手続きなどの公文書をこれまでのようにラテン語や地方語で作成してはならないという趣旨の勅令は、パリ方言が王国の公用語になったという意味で重要である。印刷活動の活発化や王の勅令は、パリ中心の言語が規格化され、地方語を制して新たな展開をみせる契機となった。

このように16世紀は、パリ地方の言葉が国家語としての歩みを始めた時期であるが、あのラブレール（1495年？－1553年？）の生きた時代でもあり、Huguetによる7巻本の『16世紀フランス語辞典』は、当時のフランス語の語彙がいかに豊かであったかを示している。ちなみにHuguetの辞典でvingtの項を検索すると、six vingts から始まって、dix vingts を除く douze vingts までの用例が記録されている。なかで9例を数える six vingts は、用例数では他の数の2～3倍の量であり、100以上のvingtの倍数で17世紀まで残るのは six vingts のみという前途を预言している。また、vingt の後には端数を伴わないものの方が多いのであるが、six vingts et dixhuyt charretees de casse “138台の荷車”（Marty-Laveaux 編『ラブレール全集』Ⅱ，p. 33）や、six vingt quatorze millions deux escuz et demy d'or “金貨1億3400万2.5エキュ”（同Ⅰ，p. 47）などの例もあって、瞬時に10進法で捉え直すことは難しい。特に後者は、ラブレール流言葉遊びとみるべきであろう。septante, huitante, octante, nonante についてもそれぞれ6～7例ずつ採録されていて、出典はラブレール、カルヴァン、ドービニエなどである。Huguetの辞典でみるかぎり、中世にあった setante, septante のうち、setante は消えて septante に統一されている。また、同じく中世に存在した oitante, huitante, octante のうち、oitante の姿はすでに見当たらない。

16世紀はまた、初めてフランス語の文法書が編まれた時代でもあった。イギリス人 John Palsgraveによる、最初の仏文法の書『フランス語広文典』*L'Esclaircissement de la Langue Francoyse*（中味は英文）がヘンリー8世に献じられたのは、1531年のことであった。Palsgraveはフランス語を学ぼうとするイギリス人に、つぎのように説いている。⁽⁸⁾

庶民は six-vingts, sept-vingts, huit-vingts … dix-neuf-vingts というが、教養人は〔もっと〕新しい数え方をする。教養人が septante, octante, nonante と言うところを、庶民は好んで soixante et dix, quatre-vingts, quatre-vingts et dix という。⁽⁹⁾

庶民と教養人を対比させたところに、教養人たらしとする者は、soixante et dix, quatre-vingts, quatre-vingts et dix ではなく、septante, octante, nonante を使うべきであるとするPalsgraveの主張が読みとれる。

大きな数については、綴り字改革主義者として有名な Louis Meigret が、『フランス文法論』*Le Tretté de la Grammeire Francoëze*（1550年）で論じている。彼は cent huytante について、neuf vingts または çent qatre vings でもよしとするが、200以上の数に20の倍数を使う風潮には批判的である。

douze vins, treze vins, qatorze vins, dizèsèt vinz, dizèhuyt vins, dizèneuf vins は、好ましからざる習慣のもたらしたもので、われわれならば deus çens qarante … のように言う。〔奇数項についても〕deus çens çinquante, [deus çens] soëssant' dis, [deus çens] e qatre vins dis とすればよい。⁽¹⁰⁾

それにしても10進法に慣れているわれわれにとって、200以上の20進法はなんという複雑さであ

ろうか。ラテン語からの伝統を重んずる純正主義者でなくとも、10進法支持に回ろうというものである。事実 Meigret がここで扱っている200より上の数は、cent とともに表記されるような方向に進む。そして比較的下位の数が、vingt 単位の記数法によせる人々の執着を引き受けることになるのである。Palsgrave のような10進法びいきの文法家の啓発にもかかわらず、実情は quatre vins が octante を制して優位に立っていた。six vins も cent vins より勝っていた。しかし huit vins になると、これは cent soixante と互角の形勢にあった。quinze vins は病院の名前にその痕跡を留めているだけで、殆んど使われなくなっていた。⁽¹¹⁾

ルネッサンス期の16世紀から古典主義の17世紀に移ることにしよう。17世紀の状況は Vaugelas が記している。当時の代表的な作家たちがこの本の判断に従ってことばを決めたとされる、彼の『フランス語注意書き』*Remarques sur la Langue Française* (1647年)は、体系的な文法書ではなく、当時の宮廷人たちの言葉の観察記録であった。その中で Vaugelas は次のように書いている。⁽¹²⁾

70 はかならず soixante-dix とすべきである。ひとつだけ例外があるが、それは「エジプト王の命により旧約聖書をヘブライ語からギリシア語に翻訳した」70人の注釈者たちを指す時で、la traduction des Septante, les Septante Interprètes, またはたんに les Septante と呼ぶ。80は octante ではなく quatre-vingts, 90も nonante ではなく quatre-vingts-dix という。

Vaugelas が septante, octante, nonante をとらずに soixante-dix, quatre-vingts, quatre-vingts-dix を選んでいることに、当時の宮廷人たちの間でさえ、後者の方が広まっていたことを読みとることができる。ところで100以上の数はどうなっていたのだろうか。宮廷通訳官であった Antoine Oudin の『現代フランス文法』*Grammaire Française Rapportée au Language du Temps* (1632年)によれば、20進法のうち使われているものは、quatre vingts, six-vingts, sept-vingts だけであるという。⁽¹³⁾ “近代フランス語は17世紀に始まる”ということが通説になっているが、Vaugelas と Oudin をつき合わせてみると、17世紀のこの時期に、現在の標準フランス語の数詞がほぼ確定したことがわかる。Oudin は消えゆく septante, octante (huitante), nonante について、計算用語としてのみ余命を保っているとしている。70~100までの10進法には、分野によって捨て難い利点があったのである。

17世紀で他に特筆すべきことは、フランス語の辞典が刊行されたことである。Richelet の *Dictionnaire François* (1680年)、Furetière の *Dictionnaire Universel* (1690年)、*Le Dictionnaire de l'Académie Française* (1694年)は、この時代を代表するものである。これらの辞典では、数詞はどのように扱われているだろうか。

septante — 「聖書の70人の翻訳者」という説明が、三つの辞典に共通するものである。アカデミーの辞典では、その他に計算用語として用いられるとしている。

octante — リシュレの辞典には、この項目は見当らない。⁽¹⁴⁾ フュルティエールの辞典では、quatre vingts を意味するこの単語は今では殆んど使われないとしている。また、計算用語という記述は、フュルティエール、アカデミー両辞典に共通している。

huitante — とりあげている辞典はアカデミーの辞典のみで、計算用語に限るとしている。

nonante — quatre-vingt-dix のことという記述が共通で、アカデミーの辞典は計算用語としている。

vingt の倍数 — quatre vingts 以外の20の倍数——固有名詞化している Quinze Vingts

「300人(収容のパリ盲人)病院」を除く——について、リシュレ、フルティエールの両辞典には特に説明はない。アカデミーの辞典では、*quatre vingt*, *six vingt* は日常的に使われるとした上で、*deux vingt*, *trois vingt*, *cinq vingt*, *dix vingt* とは絶対に言わない、*sept vingt*, *huit vingt* は時として使われ、*onze vingt* から *dix neuf vingt* についても可能だとしている。⁽¹⁵⁾

septante, *octante*, *nonante* は、固有名詞や計算用語などの特別な場合を除き、使われなくなっていたのである。また、アカデミーの辞典が“*onze vingt* から *dix-neuf vingt* までも可能”としている点は、これまでみてきた諸説を鑑みると、妥当かどうか疑問が残る。

ここで80についてまとめておこう。中世に共存していた *oitante*, *huitante*, *octante* のなかで、前述のように *oitante* はすでに16世紀には姿を消していて、その後も復活することはない。*huitante* と *octante* は、*quatre vingts* に押されていたとはいえ、16世紀にはまだ健在だったことは、Huguet の辞典の示すところである。ところが17世紀になると両者の影はさらに希薄になり、特に *huitante* は、リシュレとフルティエールの両辞典から姿を消してしまっている。*Grand Larousse de la Langue Française* には、「*huitante* は16世紀には使われていたが、17世紀には稀になった」と記されている。しかし中世の *oitante* の場合とは異なり、*huitante* は17世紀で途絶えてしまうわけではない。18世紀から現代までその命脈は保たれていく。⁽¹⁶⁾ このようにして80台の数は、主力の *quatre vingts* に、*huitante* と *octante* という三つの選択肢のなかで揺れ動くことになる。

(3) 18世紀から19世紀まで

これまでみてきたように、今日の標準フランス語の記数法は、17世紀にはほぼ確立された。

1789年に勃発したフランス革命は、言語そのものにはさほど影響を及ぼさなかったといわれる。しかし革命は、言葉をめぐる社会環境にいくつかの点で重大な変化をもたらした。1799年に政府が採用に踏み切ったメートル法は、タレーランが度量衡の統一を提起したことに始まる。つぎつぎに打ち出される新政策を国のすみずみまで行き渡らせるためには、各地に根付いている地方語ではままたまならず、標準フランス語を広める必要があった。こうして1791年に「タレーランの教育計画」が議会で発表された。公教育の実施に先立って必要となるのは教員の養成である。ところでロレーヌ地方出身の神父 Henri Grégoire (1750年—1831年) は、アンケートによるフランス全土の言語調査によって、地方語の多様さを明らかにしたうえ、共通フランス語普及の必要性を主張した人物として知られているが、Brunot はその著『フランス語史』の中で、1794年付けでこの神父に宛てられた、ひとりの地理の教師の手紙を紹介している。⁽¹⁷⁾

「師範学校がいくつか設立されようとしているこの時期に、お願いしておかねばならないことがあります。*soixante et dix*, *quatre vingt dix* それに *quatre vingt* もですが、これらは20進法で数えていた無学な時代を想起させるものでして、算数教育では、こうした低俗な表記は廃止するようにしていただきたいのです。あなたのような方でしたら、私が廃止を望むのも、低俗云々もさることながら、初学者の苦勞を思えばこそであることをご理解いただけたと思います。」

しかし革命でさえ、長い間培われてきた、われわれからみればなんとも奇妙な記数システムを覆すことはできなかった。10進法を取り戻したいという願望は、その後も根強く残った。Pierre Larousse が編纂した、16巻からなる *Le Grand Dictionnaire Universel du XIX^e Siècle*

(1866年—1878年)の septante の〔注〕にはつぎのように記されている。

「今日のフランス語には、もはや 70, 80, 90 台を表わす固有の言葉がない。soixante-dix, quatre-vingts, quatre-vingt-dix という野卑な語 mots barbares によってこれを表わす。この方法は複雑であるばかりか、非論理的である。それゆえ、かつて使われていながら不当にも捨てられてしまった septante, huitante,⁽¹⁸⁾ nonante にとり代えるべきである。」

こうした論調は、huitante, nonante の項でも繰り返されている。

「きわめて有益なことば (= nonante) が, quatre-vingt-dix というばかげた表現に譲歩してしまった。その時以来われわれは, 90 台を数えるとき, すっきりした形ではなくて, 20 に 4 を掛けたものにさらに 10 を加えるという言い方をせざるを得なくなってしまったのだ。」

ラルースの『19世紀万有大事典』と同時期に刊行された Littré の *Dictionnaire de la Langue Française* (1863年—1872年) でも, Littré は septante, octante, huitante, nonante について, いずれも古くなってしまっただと嘆いている。とりわけ septante については, これは quarante, cinquante, soixante の線上に並ぶものであるから, septante が再び甦って, soixante-dix を駆逐してしまえばよい, とまで書いている。医者という自然科学の徒でもあった Littré は, 習慣とはいえ, この煩雑なシステムに我慢できなかったのであろう。

Ⅲ. 南仏オック語における数詞

これまで標準フランス語すなわちイール・ド・フランス地方を中心とした北フランスの言葉について検討してきた。ところで南フランスを中心とするオック語では事情はどうだったのか, 中世語と現代語を簡単にみてみよう。

北フランス文学の代表作が書かれ始める11世紀頃, 南フランスでは, 北の言葉オイル語とはかなり異なるオック語で書かれた文学が誕生していた。南方吟遊詩人トゥルバドゥールたちは, オック語で愛の詩や聖母讃歌を書き, みずから作曲してメロディーをつけた。当時のオック語の数詞は, つぎのように 10 進法を基調としていた。⁽¹⁹⁾

20, vint — 30, trenta — 40, quaranta — 50, cinquanta — 60, seissanta — 70, septanta — 80, quatre vint — 90, nonanta, noranta — 100, cent.

80だけは, 北仏から移入されたと思われる 20 進法をとっている。80 は quatre vint だけで, 10 進法の形はなかったのだろうか。これについては, Grangeant による中世オック語の手引書も, 上記 Anglade の記述と同じで, quatre vint しか載せていない。⁽²⁰⁾

これらの中世オック語に現代オック語を重ねてみると, 70 までは, 中世のものがそのまま現代まで生きていることがわかる。80 は, 現代オック語では quatre-vingts, oitanta, ochanta のいずれでもよく, 10 進法を復活させている。また 90 は, 現代語では nonanta または nananta と数える。nonanta は今も昔も変わらないが, ヴェリアントであるもう一方の語形が少し変化している。⁽²¹⁾ quatre-vingts のような例外を抱えてはいるものの, 今も昔も 10 進法を基調とするオック語は,

北仏の言葉よりも中世からの形が保たれているといえる。

Ⅳ. ブルトン語・バスク語・デンマーク語の数詞について

20進法はフランス語に独特のものであろうか。決してそうではない。フランスは国内に四つの非ロマンス系方言を抱えている。六角形の国土の北の頂点にゲルマン系のフラマン語地域、その斜め右下の頂点に同じくゲルマン系のアルザス方言地域がある。また、大西洋に突き出たブルターニュ地方にはケルト系のブルトン語、その下に位置する頂点で、スペインとの国境地帯にあるビレナー＝アトランティック県では、非印欧系とされるバスク語が話されている。これらのうちでブルトン語とバスク語は、20進法をとる言葉として知られている。フランス国以外の大陸の言葉としては、北ゲルマン語に属するデンマーク語も20進法の数詞を持つ。これら三つの言葉は、表3にみられるように、20進法的色彩がいずれもフランス語以上に濃厚である。

バスク語の数詞は完全な20進法で、20から40、40から60に至る間の数は、20や40のあとに

表3 バスク語・ブルトン語・デンマーク語の数詞

数詞	バ ス ク 語	ブ ル ト ン 語	デ ン マ ー ク 語
1	bat	unan	en
2	bi	daou	to
3	hiru	tri	tre
4	lau	pevar	fire
5	bost	pemp	fem
6	sei	c'houec'h	seks
7	zazpi	seiz	syv
8	zortzi	eiz	otte
9	bederatzi	nao	ni
10	hamar	dek	ti
11	hamaika	unneg	elleve
12	hamabi	daouzeg	tolv
13	hamahiru	trizeg	tretten
14	hamalau	pevarzeg	fjorten
15	hamabost	pempzeg	femten
16	hamasei	c'hwezeg	seksten
17	hamazazpi	seiteg	syttten
18	hemezortzi	triweh	atten
19	hemeretzi	naonteg	nitten
20	hogeï	ugent	tyve
30	hogeïtahamar	tregont	trediv
40	berrogeï	daou-ugent	fyrre(tyve)
50	berrogeïtahamar	hanter-kant	halvtreds(indstyve)
60	hirurogeï	tri-ugent	tres(indstyve)
70	hirurogeïtahamar	dek ha tri-ugent	halvfjerds(indstyve)
80	laurogeï	pevar-ugent	firs(indstyve)
90	laurogeïtahamar	dek ha pevar-ugent	halvfems(indstyve)
100	ehun	kant	hundrede

1 から 19 を添えて作る。例えば hogeitahamaika (31) は, hogeï-ta-hamaika (20・そして・11) から成る。フランス語の 80~100 までの方式が, 20 台から始まるわけである。

ブルトン語は 50 台を除く 40 以降に 20 進法がみられる。20 の倍数からはみ出した端数を, バスク語やフランス語とは逆に前方に置く。例えば, 22 は daou warn-ugent (2・上に・20), 72 は daouzek ha tri-ugent (12・そして・3・20) となり, warn と ha は, とともにプラスの意味で挿入される。

デンマーク語は 40 台まで 10 進法で進む。20 は tyve となっているが, これは to tyve の to (= 2) が省略されたもので, tyve は元来“10”を意味し, これは次にくる 30 と 40 の呼称の中に生きている。50 から 90 にみられる sind は“倍”のことで, 60, 80 はそれぞれ 3×20 , 4×20 となる。50, 70, 90 は [半分・ 3×20], [半分・ 4×20], [半分・ 5×20] と並んでいて, これは [20 の第 3 番目が半分], [20 の第 4 番目が半分] … のことである。なお, 40 から 90 までは後方を略した形で使うこともできる。20 進法に減法を加味したような数え方は, バスク語やブルトン語以上に複雑であるが, 数詞そのものを専門に扱う分野では, つぎのように簡略数字が使われるという。

〈20, 30, … 90〉は, 銀行や郵便局の語法 (例えば小切手, 為替の数字記入) では, toti, treti, firti, femti, seksti, syvti, otteti/otti, niti の形が用いられる。この形は, 近年デンマーク文部省も学校教育で普及することを求めている。⁽²²⁾

10 進法か 20 進法かのどちらか一方に絞るのではなく, 用途によって簡略 10 進法を用いるデンマーク方式は, 古くからの慣習と, 合理性志向との両者を調和させたものといえる。

このようにみえてくると, 20 進法はフランス語に特有のものではなく, ヨーロッパの西部に今でも残る現象であることがわかる。⁽²³⁾ ところでこうした環境の中にあつて, 祖語のラテン語にはない 20 進法を, フランス語はどこからとり入れたのだろうか。quatre-vingts や soixante-dix は, ヴェルトブルクやニュロップが 12 世紀に初出としているのであるが, 実際にはそれよりかなり前から人口にのぼっていたはずである。その起源について, 学者たちの意見はほぼ一致している。ローマ人がガリアの地に侵入する以前の住先民族ケルト人がもたらしたものとする説である。いくつかの部族に分かれていたケルト民族の中には, 確かに 20 進法を採用していた部族もいた。特にウェールズのケルト人については, 非常に古い写本によって確認されているという。⁽²⁴⁾ しかしその昔ガリア地方にいたケルト人に関する資料は残っていない。それゆえ, フランス人の祖先であるガロ＝ロマン人にケルト人から数詞が伝わったことを検証することは今のところ不可能なのである。ケルト起源説以外には, ロマン語文獻学者として知られているロールフス G. Rohlfs によるノルマン起源説がある。⁽²⁵⁾ ヴァイキングと呼ばれたノルマン人は, 紀元 800 年頃英仏海峡に出没しはじめたが, 彼らの居住地はスカンディナヴィアとデンマークであつた。彼らは, 911 年にシャルル 3 世との間で交わした取り決めによって, 現在ノルマンディー地方と呼ばれている地域に定住した。Marcel Cohen によれば, ノルマンディー地方のカルヴァドス県の町 Bayeux には, 12 世紀までデンマーク語が残っていたという。⁽²⁶⁾ 定住後のノルマン人は, 1066 年にイギリスに攻め込むのであるが, 同じ頃その一部はイタリア南部とシチリア島に向かい, サラセン人を駆逐してここにもノルマン王国を建設した。現在の南部イタリアやシチリアの方言に 20 進法がみられることを文法家たちは指摘している。⁽²⁷⁾ フランス語の 20 進法がどこから来たかについて, ケルト説, ノルマン説のどちらをとるにせよ, 問題はフランス語の誕生以前にさかのぼることであり, 検証は困難なようである。

V. ベルギー、スイスにおける数詞について

フランス語はフランス共和国だけの言葉ではなく、地理的、歴史的にフランスとの関係の深い国々でも使われている。ここでは特にベルギー、スイスのフランス語における数詞についてみてみよう。

1830年にオランダから独立したベルギーは、独立以来フランス語を公用語としていたが、1898年にオランダ語も公用語として認めるに至った。その結果北部のフランドル地方はオランダ語、南部のワロン地方はフランス語、首都ブリュッセルは二言語併用地域と定められた。ベルギーの公用語では、70, 80, 90を *septante*, *quatre-vingts*, *nonante* と言い、学校教育もこれでなされている。*Grand Robert* によれば、ベルギー人は *soixante-dix* をフランス国での数え方と認識しているという。*huitante* はベルギーでは使われていない。*octante* も同様である。ロベール社刊の *Dictionnaire Historique de la Langue Française* には、ベルギー人は *quatre-vingt-dix* を一種の *anomalie* と受けとめる、と記されている。ベルギーでは、*septante*, *quatre-vingts*, *nonante* が安定していて、80も揺れがなく *quatre-vingts* に収まっているとみてよいだろう。

スイスには四つの公用語があり、1980年の調査によればその分布は、ドイツ語 73.5%, フランス語 20.1%, イタリア語 4.5%, ロマンシュ（レト・ロマン）語 0.9%, その他 1% となっている。どの言語を州の言葉とするかは各州に任されている。⁽²⁸⁾ フランス語の州はジュネーブ、ヌシャテル、ヴォー、ジュラの四州で、ドイツ語とフランス語併用の州がベルン、フリブール、ヴァレの三州である。スイスの公用語では70, 80, 90を *septante*, *quatre-vingts*, *nonante* と数える。これはベルギーの公用語とまったく同じである。しかしベルギーと異なる点は、*quatre-vingts* に加えて、*huitante* も各地に浸透していて、公的サービス機関でも広く使われていることである。*octante* はまったく使われないという。⁽²⁹⁾ フランスでは、17世紀にヴォージュラが規定した宮廷人の流儀がそのまま現代に引き継がれている。19世紀の辞典編纂者の Larousse や Littré が10進法に切り換えるべきだと声を大にして叫んだが無駄であった。ところがベルギーやスイスでは、根強い伝統のある *quatre-vingts* だけはそのままに、その前後は、フランス国で16世紀を最後に近代語からは締め出されてしまった *septante*, *nonante* を活かしているのである。*quatre-vingts* についても、恐らく native speaker たちは分析的に 4×20 と捉えるのではなく、一語として瞬時に捉えるのであろうが、例えば電話番号のように正確で迅速な対応が求められる場では、スイスのように *huitante* も使える方が便利であろう。周辺国のこのような流儀をフランス国の人々がどのように見ていたか、つぎの Dauzat の発言は興味深い。

ラテン語から出て来た形である *septante* 「70」、*octante* 「80」、*nonante* 「90」は古語に見られるが、引き下がらざるをえなかった。これらの数字はフランスの南部、東部、スイスのフランス語地域、ベルギーのような、もっともラテン語化され、ゴール語の基層浸透の最も少ない地域にしか定着していない。スイス人は学校や官庁においてこの古いすたれた形を絶対的な強制をもって押しつけて、自己の独自性を出そうと無駄な努力をしている。この形はフランスのフランス人にはもはや理解できないものである。数詞の構成がいかに重苦しいものであろうとも（記数法では重苦しさは実質的な重要性をもたない、というのはそこで求められているものは正確さであるから）、慣用の絶対的判決に対して救済手段はもはや存在しない。訴訟には判決が下されているのである。⁽³⁰⁾

スイスやベルギーでの方式は、言葉の変遷の結果なのか行政の介入によるものなのか、もしくは両者が関与しているのかについて、今のところ筆者には解らない。Dauzat の熱い反応に対して、R. Georgin はもっと冷めた眼で現状を具体的に分析している。

ベルギーやスイスでまだ使われている *septante*, *nonante* といった古い形はフランスでも認められるだろうか。例えば小切手に *septante huit francs* と記入することが許されるだろうか。もしそうなら喜ばしいことだ。そうすれば、よくある電話番号の間違い——*soixante-six* (66) と *soixante-dix* (70), *soixante-sept* (67) と *soixante-seize* (76), *quatre-vingt-six* (86) と *quatre-vingt-dix* (90)——も避けられるだろうから。10進法の古い名称を使えば便利なことは確かだ。しかしそれらが使われなくなってから久しい。今さら復活させようとしても無理だろう。70年戦争 [= 1870年の普仏戦争のこと] を *Guerre de Septante* と言ったところで [何のことか] 誰にも分かるまい。⁽³¹⁾

Guerre de Soixante-Dix のような固定した表現は、*Quinze-Vingts* が病院名として今でも残っているように、固有名詞として存続させることも可能だと思われるが、Georgin はとにかく悲観的である。

おわりに

パリをフランス語文化圏の中心に位置づけると、南仏やベルギー、スイスのフランス語使用地域は、これに次ぐ地域文化圏とみなすこともできる。文学の分野では、*septante* や *nonante* は、この地方色を示す“薬味”として使われることがある。しかしローザンヌ生まれの Ramus のような作家にとっては、——*Trésor de la Langue Française* は、*septante* と *huitante* の項に Ramus からの例を引用している——それらの数詞は何ら特別の意味を持つものではない。Grevisse によれば、一部の言語学者らの指摘に反してフランスではこうした数詞が結構使われているし、地方色の効果や作家の出身地とは無関係な使われ方もあるというが、筆者としてはきわめて稀というのが実感である。⁽³²⁾

septante, *octante* (*huitante*), *nonante* が標準フランス語から姿を消すのは17世紀のことであつたが、当時の辞典には、計算用語としては命脈を保っていると書かれていた。これに類する記述は、実は現代の文法書にも見い出すことができる。*Grammaire Larousse du Français Contemporain* にはつぎのような一節がある。

小学校の教師のなかには、計算を教えるのに好都合という理由で、古い形である *septante*, *octante* (*huitante*), *nonante* を使う人がある。この奇妙な方法は、1945年の通達 *Instructions officielles* で推奨されてさえいるのである。⁽³³⁾

こうしたことが現実にとどの程度行われているかは分からない。しかし度量衡をはじめ数の世界がほぼ10進法で統一されている現在——フランスはメートル法の発祥の地でもある——独特な記数法は、フランス語を学ぼうとする外国人のみならず、初等教育の場でも負担に感ずる人々がいること示している。

最近の朝日新聞に、大阪大学の太谷泰照教授が大阪大学の公開講座で行った講演に関する解説記

事が掲載された。⁽³⁴⁾ 外国人と比べて日本の生徒の数学の成績が良いのは、日本人の知能指数が高いせいではなく、日本語の10進法のお蔭だという内容である。逆に英語学習の成果が上がりにくいのは、日英語の言語構造の違いに起因しているという見解で、これは欧米語を学ぶ誰もが感ずるところであろう。数詞について大谷氏は、ヨーロッパの言語にはいろんな進法が混在し、それが計算力を伸ばす上で障害になっている。フランス語では91を $4 \times 20 + 11$ と表現するために、子どもたちは10を位どりの単位と見る意識に乏しいと述べられたそうである。数詞がもたらすこうした問題は、言語が思考を左右する顕著な例である。フランス・ベルギー・スイスにみられる数詞の違いは、歴史が古い国であればあるほど、伝統を無視できない状況にあることを物語っている。

〔注〕

- (1) 直野敦(昭和52年) p. 23.
- (2) Nyrop (1903) pp. 342-343.
- (3) Damourette & Pichon (1911) p. 493.
- (4) 60は、ラテン語 *sexāgintā* からの類推が働いて、1380年頃には *soixante* と綴られるようになった。*Grand Larousse de la Langue Française* 参照。
- (5) ラテン語 *septuāgintā* からの類推による *septante* は、1265年に確認されている。*Le Grand Robert de la Langue Française* 参照。
- (6) ラテン語 *octōgintā* から音韻変化を経てできた中世フランス語には、方言によって *oitante* と *uitante* があった。後者は、似た形を持つ *uit* が、*u* と *v* を混同されないために *huit* となったこともあって、13世紀頃には *huitante* と書かれるようになった。同じ頃、ラテン語から直接 *octante* が造語された。その結果10進法の80には、*oitante*, *huitante*, *octante* の三語が並ぶことになったが、そのうちの *oitante* は、16世紀を待つことなく消える運命にあった。*De la Chaussée* (1989) pp. 53-55, Nyrop (1903) pp. 335-337, *Grand Larousse de la Langue Française* の *huitante* の項参照。
- (7) Nyrop (1903) p. 338.
- (8) Haase (1935) p. 116.
- (9) 数詞に限らず綴り字の安定をみるには、18世紀を待たなければならない。特に20の倍数となる *vingts* の末尾の *-s*, *vingt* の後にさらに数字が続くときの *et* の有無は不安定だった。
- (10) Brunot (1905) Tome II, p. 310 参照。表記には、Meigret 独自のものがうかがえる。
- (11) ルイ9世は、13世紀に *Quinze-Vingts* という名前の施療院をパリに創設した。“収容人員300人”の盲人専門病院であったが、現在も眼科専門病院として残っている。
- (12) Vaugelas (1647) p. 240.
- (13) Oudin からの引用は、Brunot (1905) Tome III, p. 286 による。なお Haase は、17世紀の数詞で現代語にみられないものとして、*six-vingts* のみをとりあげている。*six-vingts* は用例も多く、特に生命力が強かったようである。Haase (1935) p. 116 参照。
- (14) *octante* は、1759年度版のリュレの辞典には採録されていて、“80のこと、今では殆んど使われない”とある。
- (15) この頃は綴り字がまだ安定していなかったため、20の倍数の語尾に *-s* を添えるか否かは辞典によってまちまちであるが、アカデミーの辞典では、後続する名詞がない場合には *-s* は不要と断じている。ここではその形をそのまま引用した。
- (16) 後述するように、*huitante* は現在スイスで使われている。
- (17) Brunot (1905) Tome X, 2^e partie, p. 628.
- (18) *Le Grand Dictionnaire Universel du XIX^e Siècle* は *huitante* の項で、*huitante* を古語と定義し、“*Octante* にとって代ったが、あの低俗な *quatre-vingts* に地歩を譲ってしまった”としている。
- (19) Anglade (1977) p. 236.
- (20) Grandgent (1973) p. 98.
- (21) 工藤進(昭和55年) p. 96.

- ② 岡田・菅原・間瀬（昭和59年）p. 94.
- ③ われわれに身近なところでは、アイヌ語の数詞も20進法をとることで知られている。『言語学大辞典』（1988）第1巻参照。
- ④ Nyrop (1903) p. 343.
- ⑤ Brunot et Bruneau (1969) p. 247.
- ⑥ Cohen (1950) p. 69.
- ⑦ Nyrop (1903) p. 342.
- ⑧ 『平凡社大百科事典』（1985）第7巻参照。
- ⑨ 70, 80, 90 のスイス、ベルギーにおける呼称の現況については、在京の両大使館関係者のご教示を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。
- ⑩ ドーザ (1982) pp. 245-246.
- ⑪ Georgin (1969) p. 158.
- ⑫ Grevisse et Goosse (1986) p. 926.
- ⑬ *Grammaire Larousse du Français Contemporain* (1964) p. 261.
- ⑭ 朝日新聞, 1994年10月31日付け朝刊参照。

〔参考文献〕

- Anglade, J. (1977) *Grammaire de l'Ancien Provençal*, Paris, Klincksieck.
- Brunot, F. (1905) *Histoire de la Langue Française dès Origines à 1900*, Paris, Armand Colin.
- Brunot, F. et Bruneau, C. (1969) *Précis de Grammaire Historique de la Langue Française*, Paris, Masson et Cie.
- Cohen, M. (1950) *Histoire d'une Langue: Le Français*, Paris, Les Editeurs Français Réunis.
- Damourette, J. & Pichon, E. (1911) *Des Mots à la Pensée*, Tome VI, Paris, D'Artrey.
- De La Chaussée, F. (1989) *Initiation à la Morphologie Historique de l'Ancien Français*, Paris, Klincksieck.
- Georgin, R. (1969) *Comment s'exprimer en français ?*, Paris, Editions Sociales Françaises.
- Grandgent, C. H. (1973) *An Outline of the Phonology and Morphology of Old Provençal*, New York, D. C. Heath & Co., Publishers.
- Grevisse, M. et Goosse, A. (1986) *Le Bon Usage*, Gembloux, Duculot.
- Haase, A. (1935) *Syntaxe Française du XVII^e Siècle*, Paris, Delagrave.
- Nyrop, K. (1903) *Grammaire Historique de la Langue Française*, Tome II, Copenhague, Det Nordiske Forlag.
- Vallé, F. (1944) *La Langue Bretonne en 40 Leçons*, Armand Prud'homme.
- Vaugelas, C. F. (1647, Réimpression, 1981) *Remarques sur la Langue Française*, Paris, Editions Champ-Libre.
- Grammaire Larousse du Français Contemporain* (1964) Paris, Larousse.
- Richelet, P. (1680) *Dictionnaire François*, Genève, Chez Jean Herman Widerhold.
- Furetière, A. (1690) *Dictionnaire Universel* 3 vol., La Haye et Rotterdam, Arnout & Reinier Leers.
- Le Dictionnaire de l'Académie Française* (1694) Paris, J.-B. Coignard.
- Grand Dictionnaire Universel du XIX^e Siècle* (1866) 16 vol., Paris, Administration du Grand Dictionnaire Universel.
- Littré, E. (1967) *Dictionnaire de la Langue Française* 7 vol., Paris, Gallimard-Hachette.
- Huguet, E. (1925-1967) *Dictionnaire de la Langue Française du Seizième Siècle* 7 vol., Paris, Didier.
- Bloch, O. et Wartburg, W. (1968) *Dictionnaire Etymologique de la Langue Française*, Paris, Presses Universitaires de Paris.
- Grand Larousse de la Langue Française* (1971) 6 vol., Paris, Larousse.

Le Grand Robert de la Langue Française (1985) 9 vol., Paris, Le Robert.
Dictionnaire Historique de la Langue Française (1992) 2 vol., Paris, Le Robert.
Trésor de la Langue Française (1971) 15 vol., Paris, Editions du Centre National de la Recherche Scientifique.

大林多吉（昭和57年）『スペイン語基礎単語と用例』，開拓社。
岡田令子，菅原邦城，間瀬英夫（昭和59年）『現代デンマーク語入門』，大学書林。
工藤進（昭和55年）『南仏と南仏語の話』，大学書林。
下宮忠雄（1979年）『バスク語入門』，大修館。
菅田茂昭（昭和53年）『イタリア語基礎1500語』，大学書林。
田中秀央（昭和40年）『初等ラテン語文典』，研究社。
直野敦（昭和52年）『ルーマニア語文法入門』，大学書林。
林田雅至（1987年）『入門やさしいポルトガル語』，南雲堂。
アルベール・ドーザ（1982年）『フランス語の特質』，杉富士雄他訳，大修館。
『言語学大辞典』（1988年）世界言語編全4巻，三省堂。
『平凡社大百科事典』（1985年）第7巻。